

東成瀬村上掬遺跡における大型磨製石斧の発見状況

庄内 昭 男*

はじめに

ここに紹介する石斧は1986年当博物館に所蔵されたものである。貴重な考古資料であることから、その翌年に筆者が『考古学雑誌』で発見の経過や石器の特徴について報告した経緯がある。

ただし工事中に偶然に発見されたものであることと、発見者がすでに亡くなっていたという事情から、報告時において発見地点は聞き取りを参考とし、発見状況については不明のままであった。

ところが平成元年前後に元湯沢高校教諭で県南地域の発掘調査を熱心に指導していた故山下孫継氏の写真記録の中に、その発見状況を再現した画面があることが知らされた¹⁾。これによって発見地点と、とくに発見状況について新しい知見を得ることができた。

そこで写真をもとに検証した結果を公表することを考えていたが、そのまま年月が立ってしまっていた。本年度になってようやく周辺の踏査と写真の再検証を行い、出土層位を確認するための試掘調査に入ろうとしていた。幸い調査直前に山下氏がまとめた大型磨製石斧発見についての原稿が見つかり²⁾、これまで曖昧だった点も確かめられた。

こうした経過をふまえ、石斧の発見状況について検証し、周辺の踏査と試掘調査によって得られた、遺跡と石斧との関係について考察した結果について報告したい。

1 山下氏による緊急調査の記録から

山下氏の記録および写真から、発見の状況に関わる部分と調査結果について要約した。

(1) 発見および調査の年月日について

昭和40年10月29日、農道工事に従事していた故後藤惣一郎氏が大型の石斧を発見した。そのこと

を秋田魁新報社湯沢支局から知らされた山下氏が、ただちに県教育庁の文化財係と協議の上で、11月7日に緊急調査を実施した。

(2) 緊急調査と発見地点

調査箇所は第1段丘面から第2段丘面に登る農道を工事していた場所で、ブルドーザーによって幅3～4mにわたって掘削していたと記している。農道は北西に向かって上っており、側溝となった西側が石斧の発見地点とある。緊急調査では、その側溝を西トレンチとし、東に寄って別に中トレンチ・東トレンチと呼称した計3本6区画のトレンチを設定していた。調査している状況を写した写真から、北に見える杉が現在も残っており、およその位置は対比できたが、後にこの農道は拡張されたという話であり、地点の特定は難しかった。

(3) 調査結果と土層観察について

側溝となる場所に設定した西トレンチの土層観察については図1とした実測図がある。表土の黒褐色土が40cmほど堆積し、その下は砂礫を含む黄褐色土であり、地山面としている。石斧は黒褐色土中より出土したとある。

また原稿にはトレンチ毎の出土遺物を記載しており、西トレンチで剥片石器5点・石核2点・礫石器3点が、中トレンチで叩き石1点、剥片石器5点・石核2点・礫石器3点が、東トレンチで剥片石器5点・石核2点・礫石器3点が出土したとあり、土器片の出土は無いと記している。なおそのときの出土遺物については現時点で確認できていない。

2 試掘調査の記録

1998年10月22・23日に地点の対比と層位の確認を目的として、試掘調査を実施した。拡幅などによって農道の様子が変わっているということから、

*秋田県立博物館

はじめは聞き取りによって推定された発見地点を試掘ポイントに選定し、農道の側溝際と台地上面を結んだラインにさらに2つの試掘ポイントを加えた。直線で結んだ試掘ポイントの層位を比較し、とくにうとした側溝際の試掘ポイントでは黒褐色土がかなり深いことから、谷が落ち込んで窪地となった場所に当たると判断された。そこでウから4mほど北の方に上ったエのポイント进行调查して、山下氏が緊急調査した層位にほぼ対比できる状況であることを確かめた。それぞれの試掘調査における層状は図2・3に示した。

従って石斧発見地点は谷の窪地にたいして、南側に面した緩やかな傾斜地に当たる場所であると判断した。

なお試掘調査においての出土遺物は石器素材剥片だけで他になかった。

3 遺跡の範囲と採集遺物

(1) 遺跡の範囲

石斧出土地点と周辺との関係を確認するため、試掘調査の時期を挟んで前後3回にわたり台地とその周辺を踏査した。成瀬川沿いに広がる河岸段丘面につきだした東西に長い台地が遺跡であり、下の段丘面からは20mほどの比高差がある。台地の状況は中央が高く、西と東は緩やかに傾斜している。台地の西側には、南西に向かう谷がはしり、先端では周囲の湧水を集めた谷川となって、はっきりした西の区画となっている。それにたいして東側は南に張り出す尾根上の高まりに沿って、南東に向かって浅い谷がはしり平坦面と画されている。石斧の発見地点は、南東に向かう谷が台地先端で狭まり、傾斜が急になる手前の緩斜面にあたる。地形と遺物の散布状況からみて判断した遺跡の範囲を図4に示した。

(2) 採集遺物について

台地の周囲を丹念に歩いて踏査したが、遺物はとくに西側の台地先端部に多かった。ここでは畑地として長年耕作され、表土が薄いこともあり、多量の石器・石器素材の剥片が畑の一角に集められていた。石斧が発見された東側は大部分がリング畑であり、表土が露出している場所では石器素材の剥片が散布しているだけであった。なお西側

の畑地での採集遺物³⁾について図5・6にまとめ、土器・石製品・石器の順に紹介する。文中においては図番号・図内番号をく・>で示している。

—土器— 農作業中に採集されたものであるが、<5・1><5・2><5・3>は破片点数も多く、個体としてまとまっていたものを掘り出したと思われる。

<5・1>は器壁が厚い土器破片である。底部が直径19cmに復元できたが、胴部と口縁部は接合できなかった。深鉢形になると思われる。口縁部に沿って沈線が引かれ、その下には2本の沈線による長円あるいは菱形にちかい区画文があり、沈線間には竹管による円文が付されている。その下にさらに数条の沈線が引かれ、凸となった部分には間隔をおいて半截竹管文が付されている。なお胴部には木目状撚糸文が施されている。<5・2>は胴部上半から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。口唇の一部に厚みをもたせ刻みを加えている。地文は縄文で、横位の鋸歯状の沈線を引いている。<5・3>も口縁部破片であり、丸みのある口唇から半円状の隆帯がさがり、口縁に平行に引かれた2本の沈線の下には、隆帯を中心として対称に縦位の沈線が付されている。胴部は結び目縄文が施されている。<5・4>は胴部破片であり、円形の貼付文を基点として斜位に平行沈線が引かれている。上記の土器については、文様構成などの特徴から<5・1>は大木3式に、<5・2>は大木5式に、<5・3>と<5・4>は大木6式に比定される。

—石製品— 石製品としては<5・5~7>として図示した鯉節形石製品⁴⁾が3点と、<5・8>とした楕円形を呈するものがある。

—石器— 石器は頁岩製の剥片石器である石鏃・石槍・石匙・石篋などがあり、採集された点数は200点をこえている。ここでは器種別にその一部を図化し、図6に示した。

まとめ

上掬遺跡は成瀬川中流域の北岸において最も広い平坦面をもつ台地上に立地しており、幅400mにわたって遺物の散布が認められた。遺跡はそこで採集された土器および石製品と、石器の組成か

ら縄文時代前期後半に年代が推定される。石斧の発見地点は遺跡の東側にあたり、南東に向かってはしる谷が狭まり、急な落ち込みとなる手前の緩斜面にあたる。台地先端の平坦面からは20m前後離れた位置にあたり、比高差は2m前後であった。

また山下氏の緊急調査の記録と試掘調査の結果からみて、石器剥片の散布が見られるが、西側に比べて遺物の散布が希薄な場所であることから、黒褐色土中から4本の石斧が単独に出土したものと見られる。

発見状況の写真復元では、刃縁が丸い石斧を刃縁がまっすぐな石斧がはさんでおかれ、刃先がいずれもそろって西を向いている状態であること、また1点が欠損していたが、石斧同士の間隔もほぼ等しくおかれている状況から黒褐色土中に埋納⁵⁾されたものであることが検証された。

謝辞：現地における試掘調査に協力いただきました柳邦夫氏、柳久氏、佐々木松蔵氏と、資料に関する情報の提供をいただきました鈴木俊男氏・小林克氏・本田嘉之氏に、また作図のトレースに協力いただきました高橋忠彦氏に末筆ながら感謝申し上げます。

1) 写真の存在については、当時秋田県埋蔵文化財センターに勤務していた小林克氏より知らされた。

2) 現在山下氏の発掘調査に関連した写真・原稿については、羽後町の鈴木俊男氏が保管しており、厚意により

原稿のコピーを提供してもらった。

3) 資料は佐々木松蔵氏が採集したもので、実測図作成のため借用した。

4) 鯉節形石製品は、大型住居が環状にらんで検出された秋田県協和町上ノ山II遺跡から、70点が出土しており、その特異な形状から命名されたものである。遺跡は縄文時代前期後半に年代が考えられている。

5) ここで埋納については「意識的に遺物を埋め納める、その遺跡、遺物。墓への副葬は除く。」とした認識に基づいて使用した。大型石斧は集団の祭祀に関連した遺物であるとみられるが、秋田県内で特殊な遺物が埋納された例として1987年に大館市上ノ山I遺跡で出土した鋒形石器がある。台地の先端部で検出され、近くの住居跡との関連から縄文時代前期の円筒下層a・b式の時期のものと考察されている。

文 献

庄内昭男, 1987, 秋田県東成瀬村上掬遺跡出土の大型磨製石斧. 考古学雑誌第73巻第1号

大野憲司, 1991, 大館市上ノ山I遺跡の鋒形石器について. 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第6号

秋田県教育委員会, 1988, 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II. 秋田県文化財調査報告書第166集

田中英司, 1982, 神子柴遺跡におけるデボの認識. 考古学研究第29巻3号

佐原真, 1985, ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念. 国立歴史民俗博物館研究報告第7集



写真1 大型磨製石斧発見状況の復元(1)

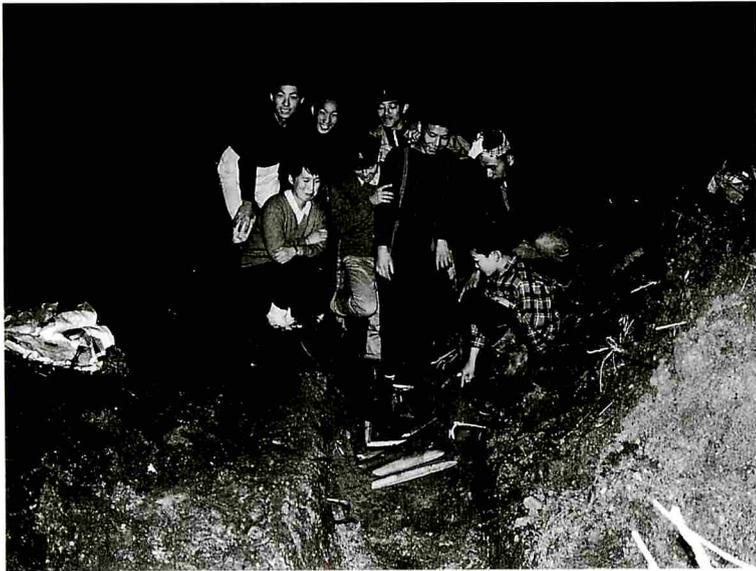


写真2 発見状況の復元(2)

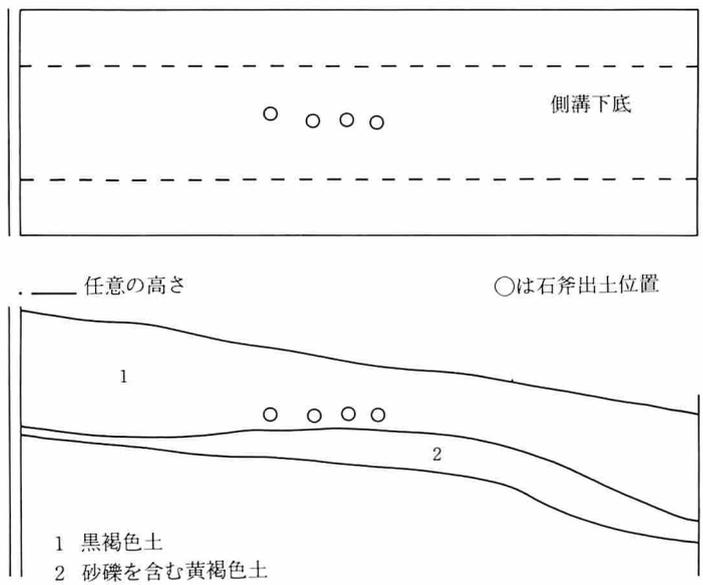


図1 側溝部分における土層



写真3 緊急調査の様子
—奥の杉がまだ残っている—



南→北

写真4 石斧発掘地点の近景

北→南



写真5 試掘ポイントウの調査状況

南→北

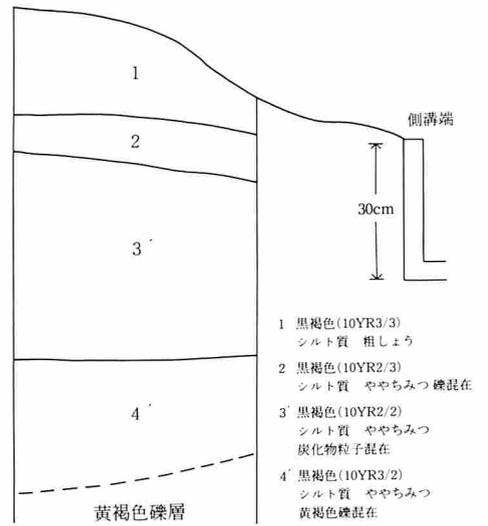


図2 試掘ポイントウの土層



写真6 試掘ポイントエの調査状況

南→北

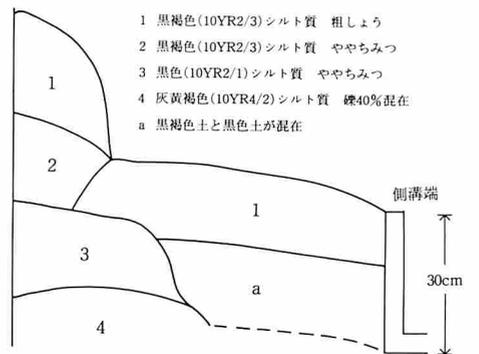


図3 試掘ポイントエの土層

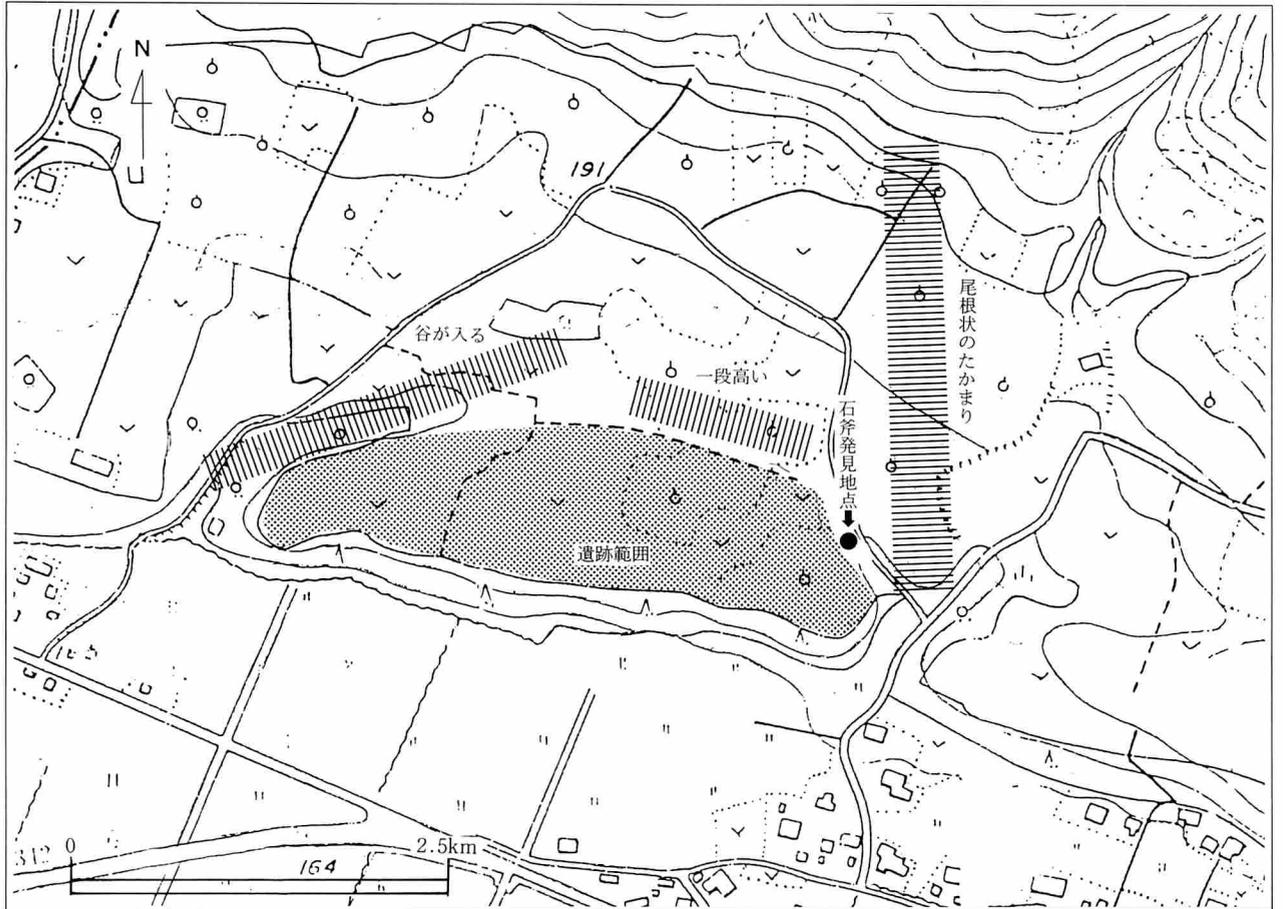
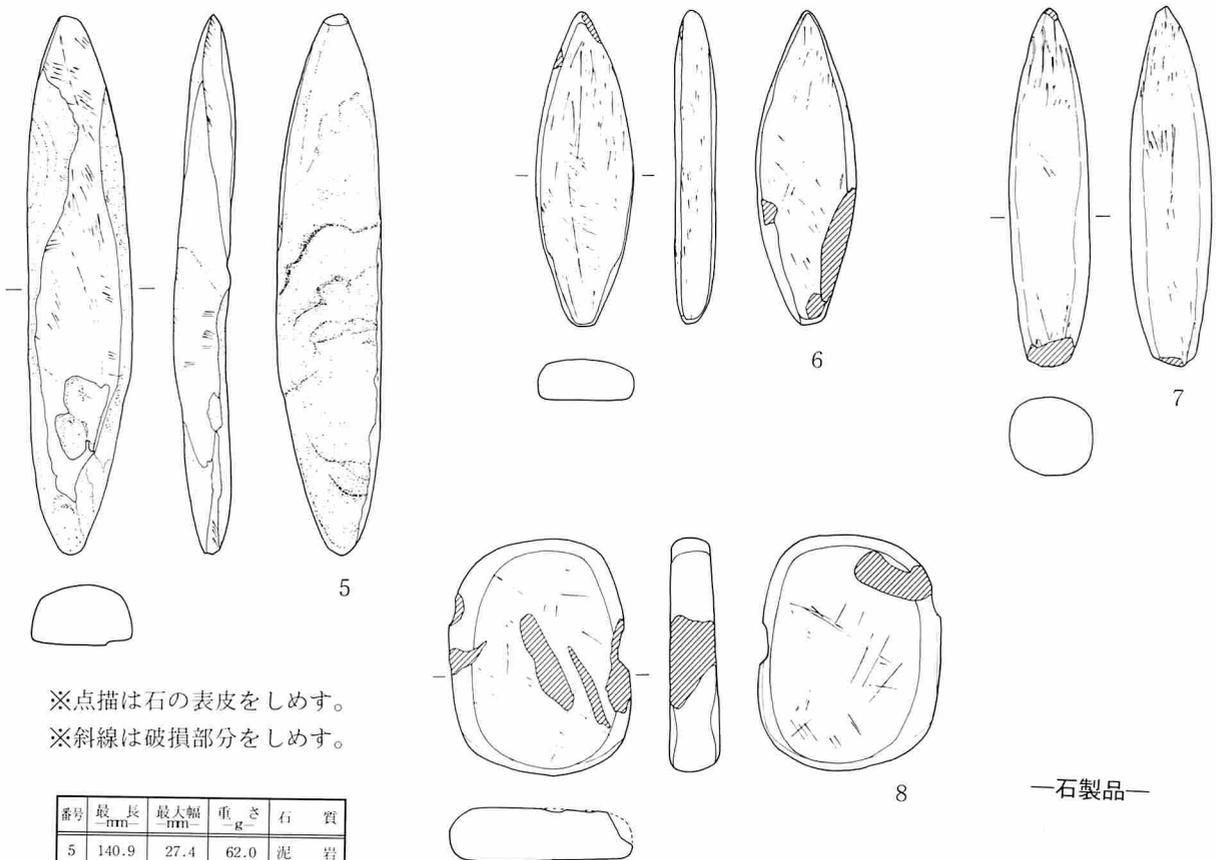
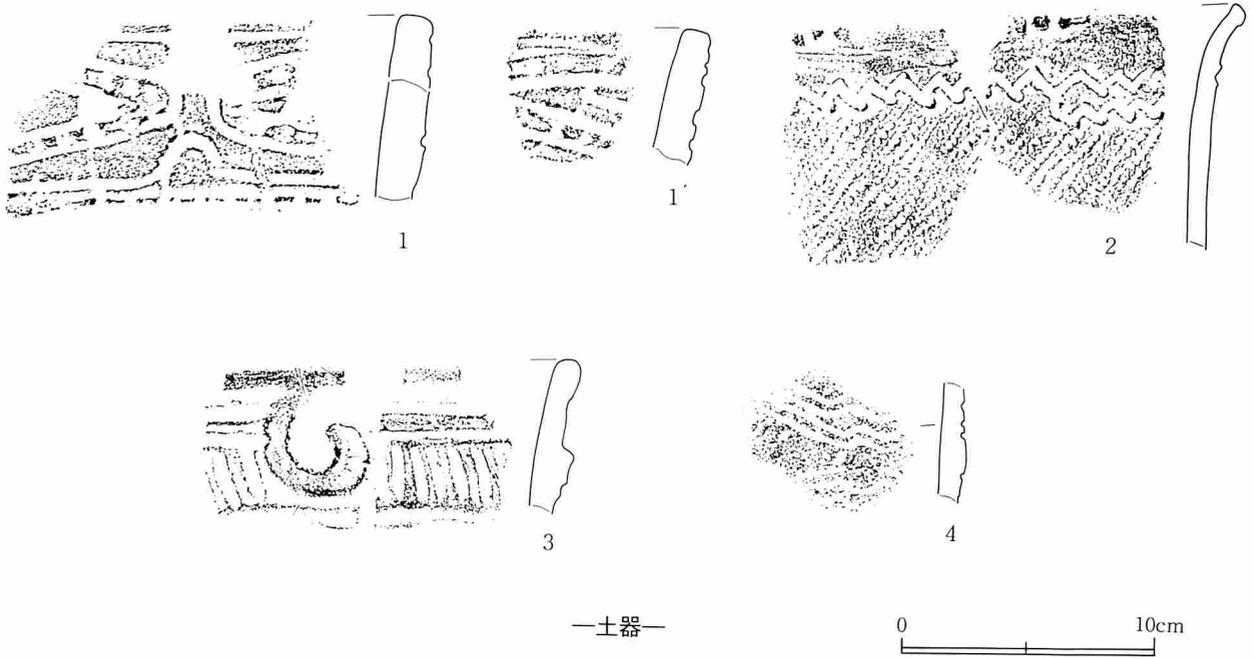


図4 遺跡の範囲

写真7 台地東側
北→南



写真8 台地中央
東→西



※点描は石の表皮をしめす。
 ※斜線は破損部分をしめす。

番号	最長 mm	最大幅 mm	重さ g	石質
5	140.9	27.4	62.0	泥岩
6	81.8	26.1	(26.0)	泥岩
7	(92.1)	20.9	(39.0)	泥岩
8	61.4	46.9	(45.9)	凝灰岩質

図5 採集遺物(1)

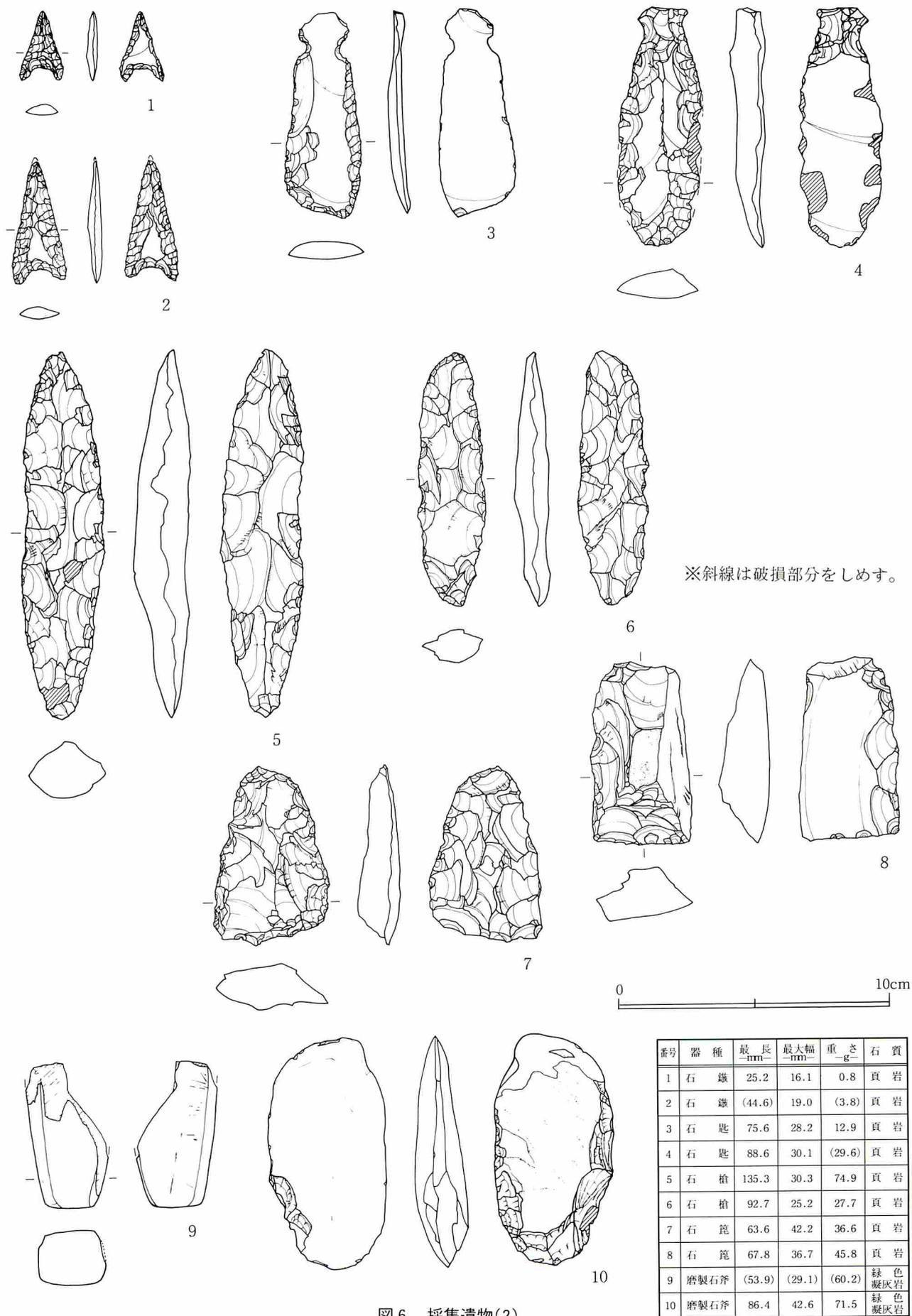


図6 採集遺物(2)